

書評

Giles Whiteley, *Oscar Wilde and the Simulacrum: The Truth of Masks*

Oxford: Legenda, 2015.

金田 仁秀

オスカー・ワイルドは、唯美主義やデカダンスといった観点での初期の批評から、ゲイ批評、クィア批評、さらにはポストコロニアル批評やカルチュラル・スタディーズに至るまで、さまざまな視点から論じられてきた。そうした動向において、ワイルドは、19世紀末を象徴するだけではなく、より現代的な人物として扱われてきた。それは多くのワイルド論が、レイモンド・ウィリアムズ、ハロルド・ブルーム、ジェフリー・ハートマン、ロラン・バルト、ミシェル・フーコー、エドワード・サイード、ジャック・デリダといった20世紀後半を代表する批評家、思想家への言及を含んでいることに現れている。本著はそうした系統に属すると言えるが、徹底的にジル・ドゥルーズとの関係でワイルドを読む試みという点で新しい。ここでは、ドゥルーズの差異と反復、シミュラークル、強度、被知覚態、変様態、生成変化といった概念を軸に、ワイルドの思想や作品がこれらといかに類似しているのかが論じられる。中でも、本著のタイトルが示すように、ワイルドの思想が仮面の真実をもとにしていること、それはドゥルーズが「不均等・差異を基に構築され、非相似を内在化する」ものと見なすシミュラークルに相当することが繰り返し述べられ¹、反プラトン主義、反ヘーゲル主義としての唯物論者の系譜にワイルドを位置づけることに主眼が置かれている。では、序章から結論まで、それぞれの章の内容をまとめてみたい。

序章においては、アラン・シンフィールドとミシェル・フーコーが20世紀を、それぞれワイルドの時代、ドゥルーズの時代としたことに注目し、ワイルドとドゥルーズという固有名詞が新しい思考を切り開く「出来事」を表していると論じられる。そして、ワイルドの書き物は仮面が果たす役割、シミュラークルの哲

学を通してのみ考察できるとし、ワイルドをヘーゲル主義者と見なす批評に疑問を呈する。確かにワイルドはプラトンやヘーゲルを学び影響を受けており、『オックスフォード・ノートブックス』はそれを示しているように見えるが、この時代のワイルドは創造的な試行の段階であるという。そして最も問題となる「仮面の真実」の最後の一節は、ワイルドをヘーゲル主義者と見なす根拠にはならない。それは、真実はシミュラークルの領域にあるということを意味しており、その肯定こそワイルドの唯美主義であると論じられる。そして、ドゥルーズにあってもワイルドにあっても、芸術は特異な被知覚態^{ヘルセフト}と変様態^{アフェクト}であり、起源やイデアとは結びつかないものであると述べられる。

これをワイルドの根本的な芸術思考と据える著者は、第一章において『意向集』における論考を取り上げ、いかにシミュラークルの理論がこれらにおいて展開されているのかを考察する。「芸術家としての批評家」は一見するとヘーゲル主義に基づいているように見えるが、作中人物のギルバートとアーネストはワイルドを表すのではなく、仮面である。ワイルドの批評は、それ自身が創造的で芸術となる点で、超越論的なシニフィエを追うものではなく、永遠に自身の批評を差異化するものである。このように考えるならば、「嘘の衰退」における嘘は、まさにシミュラークルの思想を表明するものである。そしてこれはニーチェの嘘についての考え方と類似するとされる。さらに、解釈の新たな可能性についてのフーコーの議論に言及しながら、マルクス、ニーチェ、フロイトの系譜に、ドゥルーズはもとより、ワイルドは最も符合すると論じられる。そして、ドゥルーズ同様、ワイルドにとって解釈は差異の肯定であり、個人主義への道であると述べられる。

第二章では、ワイルドの批評を引き続き扱いながら、ワイルドの歴史哲学や批評は強度の哲学であるとし、ドゥルーズの強度の概念と関連付けて論じられている。ここでも、ワイルドがいかに観念論者ではないのかが繰り返し主張される。例えば、「歴史的批評」では芸術として歴史を書く可能性を考えているとされ、それが「芸術家としての批評家」におけるシミュラークルとしての歴史へと発展すると述べられる。時系列的に見るならば、「歴史的批評」がそうであるように、『オックスフォード・ノートブックス』をはじめとした初期のワイルドの思考には、ヘーゲル主義的で観念論的に見えるようなところがあるが、それほど単純ではないというのが著者の見解である。そこでルクレティウス、ヒューム、ライプニッツ、スピノザとワイルドの関係に触れながら、力について語るワイルドの哲学は唯物論に近づくとされ、特にスピノザと一致すると述べられる。そこから、ワイルドによる力、強度としての芸術的表現は、ニーチェの力への意志、ドゥルーズの強

度の表現としての芸術と繋がり、さらにはワイルドの個人主義の考え方も強度の過程としての差異化であると論じられる。

第三章では、固有名詞に纏わる議論から『真面目が肝心』のアーネストという名前を考察し、それがシミュラークルであること、したがって結末におけるジャックもアイデンティティの獲得ではなくシミュラークルになることが指摘される。その議論の過程では、クロソウスキーの作品において、固有名詞がいかに同様の要素を持つのかが取り上げられ、またブラックネル夫人のセリフからジル・ド・レとワイルドの類似、マルキ・ド・サドにおける過剰の問題も触れられる。そして、この劇で不在の固有名詞は、ニーチェ、サド、ロベルト（クロソウスキーの作中人物）といった固有名詞に沿って理解しうると結論づけられ、“a”的有無による二つのアーネスト（Ernest/Earnest）の差異は、シミュラークルの戯れであると論じられる。

第四章では、ワイルドのドッペルゲンガーの扱いは同時代の他のテキストに見られるものよりも急進的であるとされ、主にドリアン・グレイに焦点を当てて論じられる。ここでは、ラカンの鏡像段階の理論がドリアンの行為を説明する手助けになるとしながらも、ラカンの主体論が不在に根差している点でワイルドの充足としてのシミュラークルとは相容ないとされ、再びドゥルーズとの類似が指摘される。ドリアンの理想的自我は、既に媒介されたイメージ、芸術である。ここから、『ドリアン・グレイの肖像』では、“fascination,” “domination,” “influence”が重要な語であると指摘され、第二章で取り上げられた強度と関連付けられる。そして、ドリアンが自分とは関係のないシミュラークルに魅了され、自らもシミュラークルであるのがこの小説の世界であると論じられる。

第五章では、ワイルドの資本主義批判と消費社会への積極的な関与という矛盾が、『ウインダミア夫人の扇』を中心に論じられる。ここではマルクスによる交換価値の指摘から、カーライルのフェティッシュ、ボードリヤールのシミュラークルとしての後期資本主義といったことが触れられ、ワイルドの仮面の哲学が、ボードリヤールの理論と関係している様が述べられる。同時に、ワイルドの理論は肯定的であるという点で、よりドゥルーズに近いとされ、ワイルドのアンビヴァレントな態度はシミュラークルの脱領土化の可能性に対する認識に起因しているとされる。続いてワイルドとファッショングダンディの議論から、ベンヤミンによるユーゲントシュティール批判、フェティシズムとファッショングダンディについて取り上げられ、『ウインダミア夫人の扇』における商品としての女性の身体について論じられるが、最終的には女性に限らず、すべての人物が商品と

して、すなわちシミュラークルとして考えられていると述べられる。そして、プラトン、カント、ヘーゲルたちのイデアはフェティッシュの対象であり、ワイルドは商品を批判しながらこうした観念論の伝統を批判しているのだと結論づけられる。

第六章では、魂と身体の二元論において身体を排除するプラトン的な思想にワイルドは反対しつつ、同性愛の感情がプラトンを通して語られるとき、シミュラークルの理論と身体とセクシュアリティの関係が考察される。ここではクロソウスキーによる倒錯の議論を経て、ドゥルーズの肯定的な同性愛が取り上げられる。そして、ワイルドにとってそうした身体を表すのは両性具有であるとし、プルーストの『失われた時を求めて』のシャルリュス男爵についての読みを通して、ドゥルーズの同性愛的な欲望の組み立て、同性愛への生成変化としての身体に相当するものをワイルドは見出そうとしていたと述べられる。さらにここから「W. H. 氏の肖像」が、ラスキンとペイターの観念論的思考と異なり、「見方」としての理論を唯物論的、身体的、感覚的、性的なものにしていると論じられる。そしてドゥルーズを援用しながら、両性具有と結びつくセクシュアリティと欲望は劇的で理論的であると主張される。

第七章では、『サロメ』を中心にワイルドの女性に対する態度に注目し、ワイルドは唯物論者として、女性嫌惡的ではなく、ポスト構造主義的なフェミニストであると論じられる。ワイルドの個人主義にはジェンダーがないにも拘らず、女性は、表象され得ないもの、つまりシミュラークルであるために、ワイルドの理論を象徴しているとされる。それはドゥルーズがいう女性への生成変化に値するというものが著者の見解である。そこからクロソウスキーの活人画がシミュラークルであることと、ワイルドの活人画への興味と『真面目が肝心』におけるセシリーの日記が重ね合わされ、嘘としての活人画の重要性が指摘される。さらに『サロメ』論へと移り、月とサロメの同化、神のいない悪魔の世界はシミュラークルと関係していること、またこの劇は象徴主義に属し、特に被知覚態と変様態としてのマラルメの新しい言語を使用するだけでなく、それを超えようとする劇であることが論じられる。そして、この劇がシミュラークルの世界であることを唯一人知っているのはサロメであり、シミュラークル自体を象徴できるのは、女性への生成変化としてのサロメだけであるとされ、それが彼女の踊りに表されると結論づけられる。

第八章では、ワイルドのパラドックスやアフォリズムというスタイルについて、ペイターとの差異やニーチェとの類似の観点から論じられる。ドゥルーズが指摘

するように、パラドックスは「出来事」を通して新たな意味の可能性を開くものであるが、ワイルドのパラドックスもこの論理に沿っている。それは普遍性という概念を脱構築する差異の表現である。ワイルドによる表層の哲学もこれと関係し、ドゥルーズ同様、それはものと思考の間に現れる「出来事」として捉えることができる。この表層の哲学はまたスタイルの理論でもあり、被知覚^{ペルセプト}態と変様態の表現であると述べられる。これはさらに政治学の問題でもあり、ニーチェとワイルドは、その武器としてアフォリズムを用いたと両者の類似性が指摘される。そして、強度の表現をスタイルとするワイルドは、ニーチェと共に反哲学の系譜に置くことができると述べられる。

結論では、ワイルドの唯物論の哲学が、ルクレティウス、スピノザ、ニーチェ、ドゥルーズと共に、反ヘーゲル主義の系譜に当てはまることを再度確認するとともに、ワイルドの哲学が笑いと喜びの哲学であることが、倫理の問題と絡めながら論じられる。そのような哲学はまた、キルケゴール、バタイユ、カントなどと結びつくものもある。ワイルドの笑いは、社会的な笑いであり、他者を迎えるものである。それは政治的で倫理的であり、全体主義の言説を転覆する喜びの表現である。獄中において、ワイルドはこうした笑いを失うとともに、シミュラークルの哲学も終えるのであるが、それ以前のワイルドの哲学は、差異の倫理学としての個人主義を表す。ワイルドは、ドゥルーズ同様、強度の差異的関係として理解される自己への配慮という、倫理的な計画を思い描いている。そのような哲学は、それ自体倫理的な像であり、抵抗の政治学として喜びの倫理学であると結論づけられる。

以上がそれぞれの章の概要であるが、取り上げられる題材や人物、思想は多岐に渡る。一方で、この概要が示唆するように、繰り返し述べられる主題はいたって明快である。それは、ワイルドの哲学が、ドゥルーズが唱えるシミュラークルの哲学と一致するというものである。そして、これをもとに展開される著者の読みは、ドゥルーズの理論をある程度知っているものにとっては、それほど斬新なものではないだろう。これは、ルクレティウス、ライプニッツ、スピノザ、ニーチェ、クロソウスキイ、フーコーといった、ワイルドとの類似性が指摘される人物が、ドゥルーズが肯定的に論じている人物であり、またドゥルーズの読みを通じた彼らの主張がしばしば援用されていることに起因する。全体としては、ドゥルーズの搖るぎない理論を前提しながら、そこから派生する人物の思想を絡め、それらがワイルドにも当てはまるという論となっているのだ。もちろん、些細な記述を頼りに新たな糸を紡ぎ出す手法は、これまでとは異なった知を「出来事」

として産み出す可能性を持つ。また、ワイルドの哲学を反ヘーゲル主義的なものとして読むことにも違和感はない。しかしながら、本書は、ワイルドを論じていながら、その論証としてワイルド以外のテクストから引用することが多々見受けられるため、肝心のワイルド論としての論拠が乏しくなる傾向があるのだ。例えば、第七章においてワイルドの女性の扱いを論じる中で、著者はワイルドのシミュラークルの理論がジェンダーとは関係ないとしながら、サロメを通してワイルドのフェミニスト的側面を主張する。しかしそこで言及されるのは、ワイルド自身のテクストではなく、ドゥルーズによる女性への生成変化の概念である。その過程で、西洋において表象され得ないものとされてきた女性が、なぜワイルドにおいては生成変化として捉えられるのかについて明確な論拠は示されない。ここでは『サロメ』を詳細に論じているにも拘らず、差異と反復に基づくドゥルーズの理論展開を唐突にワイルドに当てはめるだけなのだ。こうした問題は第六章で両性具有と同性愛を論じている中でも見られ、ドゥルーズによるブルーストの読みを参照しながら、それらをワイルドにも言えると安易にすり替えてしまう。また、歴史的洞察が欠ける点も問題であると思われる。例えば、第五章の消費社会における議論においては、世紀末と現代を行き来しながらシミュラークルの哲学は後期資本主義の論理であるとし、そうした文化が当時作られていたと述べる。しかしこから筆者が行うのは、ワイルドのアンビヴァレントな態度をドゥルーズの脱領土化の議論に飛躍させるものである。もしこれが時代的な特徴として言えるのであれば、たゞえ筆者が言うようにワイルドが歴史の断絶者であるとしても、当時の消費社会とシミュラークルの関係を探る方が、ワイルドとドゥルーズを特異な批評用語で結び付けようとするよりは妥当な議論になったであろう。

以上のように、本書はドゥルーズの魅惑的な用語を散りばめながら、ワイルドの中期の作品(1889-95)にそれらの一貫を見出すという点では斬新であるが、根拠に乏しい主張が見受けられることは否めない。他方、著者が自ら述べるように、本書自体がワイルド的であり、創造的な批評の実践であるという意味では面白い。また、反哲学の歴史を、ドゥルーズをはじめ、多様な人物とその思想を通して辿る可能性に目を向けさせてくれる点でも意義がある。そして何よりも、さまざまな批評理論や思想を予期するワイルドの現代性を改めて認識させてくれる論考として一読に値すると言えよう。

注

- 1 ジル・ドゥルーズ『意味の論理学 下』p.141. 本書で主に参照されるドゥルーズの著書を挙げておく。『差異と反復(上・下)』(財津理訳、河出書房新社、2007)；『意味の論理学(上・下)』(小泉義之訳、河出書房新社、2007)；『ニーチェと哲学』(江川隆男訳、河出書房新社、2008)；(以下フェリックス・ガタリとの共著)『アンチ・オイディップス』(市倉宏祐訳、河出書房新社、1986)；『千のプラトー』(宇野邦一他訳、河出書房新社、1994)；『哲学とは何か』(財津理訳、河出書房新社、1997)